

少女マンガに見る現代の教師像 憧れの対象としての教師

山田 浩之 *

1 問題の所在

本稿の目的は、マンガに主人公として現れた教師を分析することにより、現代の子どもが持つ教師像を明らかにすることにある。

これまでさまざまな手法によって教師像の探求が行われてきた。特に最近ではアンケートやインタビューによって児童・生徒が理想とする教師像を明らかにしようとする試みが多くなされている。しかし、これまで行われてきたアンケートなどの手法では調査者、および調査対象者が持つ教師のステレオタイプに結果が拘束されてしまう可能性がある。そのため、そこで得られる回答は、調査者、調査対象者の両者が支配されている伝統的な教師像を反映したものとなり、現在の子どもたちが曖昧なままで持っている教師像を表していない場合がある。

そこで、本稿ではメディア、とくにマンガに現れた教師像に注目した。小説、映画、マンガなどのメディアは、それが発表された当時の世相、社会状況を反映している。しかも、それが広く受け入れられたものならば、そこに現れた教師像は、メディア受容者の意識を反映していると考えて良いだろう⁽¹⁾。従って、そうしたメディアを分析することで、アンケートなどとは別の視点により、現実を反映した教師イメージが描き出せることになる。

本稿がメディアの中でもマンガに焦点を当てたのは次の二つの理由による。まず第一に、マンガが子どもの意識を強く反映していることである。「マンガ離れ」と言われながらも、マンガは重要な子ども文化の一つとなっている。さらに、マンガ雑誌では読者からの反応によりその内容や連載回数が規定され

*松山大学 E-mail:yamada@cc.matsuyama-u.ac.jp

⁽¹⁾文学においては、その内容が社会状況を反映しているとして、さまざまな研究が行われている。その理論的背景としてはエスカルピ(1959)などがあげられよう。本稿で扱ったマンガについても、同様に考えることができる。

ている。そのため、マンガに現れた教師像が子どもに受け入れられないものならば、そのマンガは早期に打ち切られたり、人物設定を変えざるを得なくなる⁽²⁾。したがって、マンガには子どもの持つ教師像が明確に表現されていることになる。

第二には、学校がマンガの主要な舞台の一つになっていることである。マンガ読者の多くが子どもであることから、マンガには学校が常に描かれ続け、「学園もの」と呼ばれるジャンルが形成されている。学園ものでは当然のことながら教師が重要な役割を担って現れることも多く、そこに現れた教師を分析することで、マンガの主要な読者である子どもの教師像を明らかにすることができるだろう。

マンガの分析に際して、まず、対象を教師が主人公、あるいは主人公に近い重要な役割を持っているマンガ(以下、教師マンガと略記)に絞り、それをほぼ網羅的に収集した⁽³⁾。対象を教師マンガに限定したのは次の二つの理由による。まず第一に教師が主人公、あるいはそれに近い人物として扱われることで、教師像がより明確に表現されていることである。教師がドラマの中心となるためには、その教師の性格や属性が細かく設定されなければならない。そうした属性と他の登場人物との関係を検討することで、より具体的な教師像を把握することができる。

第二には、教師が脇役として登場するマンガがあまりにも多すぎることである。先にも指摘したように「学園もの」と呼ばれるジャンルが形成されるほど学校を舞台としたマンガは多い。そのため、教師が現れているマンガを網羅的に収集するのは不可能に近い。また、サンプルでは恣意性が高くなり、マンガに現れた教師の全体的イメージは抽出できないことになる。

以上のような理由により、本稿では教師マンガの分析を行うが、本稿に先立って、山田(1999)はすでに同様の問題関心によって熱血教師とその変遷についての分析を行っている。その分析によれば、少年マンガにあらわれる教師は、1960年代までは熱血教師であったが、1970年代には人間臭さを持った教師となり、さらに1980年代以降は不良教師へと変化している。そして、こうした教師像の変遷にも関わらず、それらの物語には一貫して、教師を拒絶する一方で救いを求めるという子どもの二律背反的な願いが反映されていることが指摘されている。

しかし、この論文で扱われたマンガのほとんどが、いわゆる少年マンガであ

⁽²⁾マンガ連載と読者の反応との関係については、蕪木(1991)、馬居(1993)などを参照されたい。

⁽³⁾教師マンガの収集は『別冊太陽』(1991)、『別冊宝島』(1996, 1997)を参考にした。その他にも大勢の方々から、インターネットなどを通じて教師マンガについてご助言いただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

り、女子を対象とした少女マンガについては触れられていない。マンガというメディアは、とくに性別の分化が激しく、男子を対象とする雑誌と女子を対象としたものは明確に区別される傾向にある。それぞれに掲載されるマンガのテーマ、ストーリー、表現手法などは大きく異なっている。したがって、女子を対象とした少女マンガには、少年マンガとは異なる教師像が現れている可能性がある。つまり、マンガに現れた教師像を検討する場合には、少年マンガのみでなく、少女マンガも分析対象としなければならない。

そこで本稿では、少女マンガを中心に分析を行う。少女マンガに現れる教師像は、大きく「憧れ」という言葉でまとめられる。この少女たちの「憧れ」は次の二つのタイプに分けられる。一つは、「職業としての教師」と呼べるもので、このタイプには教師の職業生活と人間としての成長が描かれている。読者は、そうした教師像に憧れ、自身の将来と重ねあわせていたと考えられる。

もう一つは生徒が教師に憧れる「恋愛対象としての教師」であり、教師と生徒の恋愛が描かれる。このタイプでは、主人公は生徒であり、教師は準主人公的な位置づけにすぎない。しかし、物語の中心は教師と生徒の関係にあり、教師は欠くことのできない役割を持つ。

以下では、このように少女マンガに描かれた二つの教師への憧れをそれぞれ分析し、そこに現れた教師像と教師と生徒の関係について検討を行うことにする。なお、本分析で取り上げた教師マンガは末尾に一覧を掲載した⁽⁴⁾。

2 職業としての教師

(1) 1970年代までの教師マンガ

「職業としての教師」を描く少女マンガ(以下、職業教師マンガと略記する)は1970年代まで頻繁に現れる。その代表的な作品の一つが灘しげみ『出席をとります』である。まず、この物語の前半部分を簡単に紹介しておこう。

主人公である沢木リツコは大学卒業後すぐに中学校教師となり、ミニスカート姿という教師らしからぬ服装で学校に現れる。赴任した学校では生徒が二派に分かれて対立していたが、リツコはこの生徒たちを得意な柔道で投げ飛ばしてしまう。その後、彼女は柔道部の顧問となり、対立している生徒たちを入部させることで彼らを和解させる。さらにリツコは大胆な改革などを行い、生徒やその親たちからも信頼されるようになる。しかし、そんなリツコも恋に悩むことになる。結婚するか、教師を続けるかを選択せざるを得なくなったり

⁽⁴⁾紙幅の都合により、一覧には分析中で提示したものを中心とし、単行本巻数の少ないものなどは掲載していない。

ツコは、一度はボーイフレンドを捨てて教師を続けることを決心する。しかし、その後ボーイフレンドの真意を理解し、結婚しても教師を続けられることになる。

1970年代までの職業教師マンガとしては、他にも、もりたじゅん(1970)『キヤー!先生』、里中満智子(1971)『花よめ先生』、乾東里子原作、青池保子絵(1972)『出席をとりまあす』、西谷祥子(1973)『不良先生』、金子節子(1979)『オッス! Gパン先生』など多数あげられる。

この時期の職業教師マンガは、一般に、主人公教師の新任時からストーリーが始まる。主人公教師はミニスカートやジーパンを履いているという服装や学校の秩序を乱すような行動や失敗をすることなどで、通常の教師とは異なるという性格設定がなされている。そうした教師が数々の失敗を繰り返しながら、それを乗り越えて成長し、それとともに生徒との交流を深めていくことがストーリーの中心に据えられている。また、主人公は同僚教師などとの恋に悩みながらも「幸福な恋愛」を成就させる。つまり、職業教師マンガでは、教師の成長と恋愛の二つが重要なテーマとなっていた。

こうした物語に提示されているのは、一つには1970年代までの理想の教師像であろう。主人公教師の特異な性格設定は、当時の画一化された教師に対するアンチテーゼである。マンガ読者である生徒たちは、個性的で大きな学校改革を起こしてくれる教師を待望していたのであろう。そうした生徒たちの欲求が、このタイプのマンガに反映されたと考えられる。

もう一つは、ここで提示された理想の教師像が、たんに読者がそうした教師を現実社会で待望することにとどまらず、読者の進路についての願望を反映していることである。つまり、こうした教師マンガを読むことで、将来はマンガに示されたような理想の教師になりたいという希望を読者に生じさせ、それがさらに強化されていたのである。

1970年代までの少女マンガには、特定の職業を描いたものが多々みられる。その職業は、美容師、婦警、看護婦などから、スチュワーデス、デザイナーなどのいわゆるカタカナ職業へと変遷する。しかし、1970年代まではほぼ一貫して職業を描いた少女マンガが発表されている⁽⁵⁾。これらの職業は、当時の女性にとっての重要な専門職であった。つまり、これらの職業で成功し、自立することが、少女マンガ読者にとっての憧れとなっていたのである。

教師もそうした職業の一つであり、そのため職業教師マンガがさかんに発表

⁽⁵⁾ 職業生活を描いた少女マンガは、福本和也原作、細野みち子絵(1966)『エルちゃん美容室』、『週刊少女フレンド』、講談社、上條逸雄原作、細川知栄子絵(1970)『アテンション・プリーズ』、『週刊少女フレンド』、講談社、一条ゆかり(1974)『デザイナー』、『りぼん』、集英社など多数あげられる。

されたのであろう。読者は、自身を理想的な主人公教師の姿と重ね合わせながら自分の将来像を思い描くと同時に、恋に悩みながらも自立していく主人公に憧れていたのである。しかも、学校を職場とする教師は、年をとってからも生徒たちと青春を謳歌することができる。

教師マンガではないが、少女マンガにおける学園ものの代表作としてとりあげられることが多く、連載当時ばかりでなく現在でもよく読まれているものに庄司陽子(1978)『生徒諸君!』(全24巻、講談社)がある。この物語ではナッキーと呼ばれる主人公と友人たちの学校生活が中心に描かれ、「痛みや傷を持ちながらも明るくまっすぐ青春に立ち向かっていくナッキーの魅力によって、圧倒的な支持を得ていく。」(『別冊太陽』1991 99頁)。この主人公ナッキーが母校に戻って教師になるという幕切れは、学校という空間が少女たちの青春を代表するものであり、そこにとどまり続ける教師という職業が少女たちの憧れであったことを象徴しているのであろう。

(2) 職業教師マンガの消滅と復活

ところが、1980年代になると、職業教師マンガは激減してしまう。この後、主人公の女性が教師となり、その後成長する姿が描かれた聖千秋(1991)『君は僕の太陽だ』のような作品が断片的に発表される。しかし、このマンガのストーリーは主人公教師と男子生徒との恋愛が中心であり、1970年代までの教師マンガとは大きく異なっている。

このことから短絡的に、教師という職業が少女マンガ読者にとっての魅力を失ったと結論づけることはできない。それ以後も、先にあげた『生徒諸君!』のように主人公が教師となる、または教師を目指すマンガはいくつか描かれている。例えば、総領冬美(1985)『ボーイフレンド』(全9巻、小学館)では、主人公とともにバスケット選手を育てる教師が肯定的に描かれており、しかも、そのバスケット選手は一流選手になる道を捨てて教師になることを選択する。こうした物語に象徴されるように、1980年代以後もなお、少女たちにとって教師は重要な進路の一つであり続けたと考えられる。

それにも関わらず、少女マンガの中から職業教師マンガが見られなくなった要因として、次の二点が考えられる。一つは、女性の高学歴化と社会進出が活発になったことで、少女たちにとって望ましい進路と職業が多様化したことである。高学歴化した女性たちにとって、もはや教師は夢の職業ではなくなってしまった。また、女性が社会的に活動する場も多岐に渡り、教師は望ましいものであるかもしれないが、数ある選択肢の一つとなった。その結果、教師という職業は、少女たちの夢が表現された少女マンガの題材となりにくくなった

のだろう。

もう一つは、少女マンガとその読者が変化したことがあげられる。1970年代の終わり以降、職業教師マンガに限らず、少女マンガの中からは職業を描いたマンガが減少することになった。少女マンガに描かれるのは、少女たちの将来の夢ではなく、日常的な学園生活である。主人公は過度にデフォルメされたヒロインではなく、等身大で描かれることになる。したがって、1980年代以降に少女マンガで描かれた教師たちも、少女たちの憧れとしてではなく、現実の姿を反映したものとなった。その典型が、恋愛対象としての教師を描いたマンガなのであろう。

それが、1990年代に入ると、再び職業としての教師が描かれるようになる。しかし、そうしたマンガが掲載されるのは1970年代までのような少女マンガ誌ではなく、成人女性を読者層としたレディス・コミックである。レディス・コミック読者の年齢は高く、子どもであるとは言えない。しかし、その読者には主婦がもっとも多く、年齢層も20代から30代に渡っており(衿野 1993 38-39頁)、読者層は子どもの親となる世代にあたる。さらに、1970年代の少女マンガ愛読者が成人した後にレディス・コミック読者となっているとも考えられる。したがって、ここでレディス・コミックに現れる教師像を検討し、1970年代の教師マンガとの違いを明らかにしておくことは重要であろう。

レディス・コミックに現れた教師マンガは数多く、そのほとんどが女教師を主人公としたものである。これらの教師マンガは、1970年代までの少女マンガと同じく教師への憧れを描いている。しかし、そこに現れた教師像は表面的で、ひどく偏ったものにすぎない。その例として、『月刊Me』（講談社）に掲載された美村あきの(1993)『高校教師・野原夢子の恋』を紹介しておこう。

主人公である野原夢子は女生徒からは「イバラババア」と嫌われ、逆に男子生徒からは「のばらちゃん」と呼ばれ人気が高い。この主人公にとって、当面の問題は4年間続いた恋人との仲を深めることであり、そろそろ結婚したいと考えている。しかし、生徒が起こす問題や部活動の引率などに時間をとられ、恋人との仲はしだいに疎遠になってしまう。その上、生徒から交際を迫られ、また、恋人の浮気が発覚するなど主人公の生活は波乱に富む。そうした中、しだいに同僚の教師に心ひかれるようになり、恋の競争相手や昔の恋人を振りきって、その同僚教師と結ばれて物語は終わる。

レディス・コミックの教師マンガは、いずれもこのマンガと同様の設定になっており、他には佐藤真樹(1994)『ウエディング・ウエディング』、いidemまゆみ(1994)『オモテに出る』、吉原由起(1996)『はあはあ』、酒井美羽(1996)『涙の果実』、酒井美羽(1997)『教師にやらせな!』などがあげられる。これらのマンガでは、教師という職業の表面的な部分のみが取り上げられている。

つまり、教師は夏休みなどの長期休暇が多く、しかも恋愛の機会が多い職業とされている。したがって、主人公と生徒の交流が重要なテーマとなることはほとんどなく、生徒が起こす問題は『高校教師・野原夢子の恋』のように恋愛を妨げる障害にすぎない。主人公たちが教師になる第一の動機は恋愛、あるいは結婚対象を見つけることであり、ストーリーの中心もさまざまな異性との恋愛に限られる。レディス・コミックでの教師という職業は、容姿端麗な生徒に囲まれ、しかも、結婚相手にふさわしい男性を見つけることができるという意味で理想の職業である。

レディス・コミックには、教師に限らず、さまざまな職業についている女性が描かれることが多い。たとえ主人公女性の職業がいわゆるOLであっても、彼女らは責任ある仕事を任されるようになり、しかも、その仕事の中で素晴らしい伴侶を見つけるというストーリーは、レディス・コミックにおいて一つのパターンとして確立していると言ってよいだろう。しかし、レディス・コミックに現れる「職業は、どれも固定された意味を持つ小道具であって、作品の中で仕事そのものに対するアプローチが試みられることはない。」(衿野 1993 129 頁)つまり、レディス・コミックに現れた職業観は、現実の職業世界とは大きく乖離している。

レディス・コミックに現れる教師も、「小道具」としての職業にすぎない。そこでは、安楽で恋愛相手に恵まれた職業として無責任に教師が性格づけられており、それは現実の教師の姿とはかけ離れている。これらのマンガに重要なのは、現実の教師を描くことではなく、読者に受ける教師像を提示することなのである。しかも、レディス・コミックに「描かれる恋愛も結婚や仕事も、あるいは不倫にしても、読者にとっては、あらまほしき夢の実現であり、一種の昇華である」(吉弘 1993 47 頁)のならば、先のような安楽で恋に恵まれるというレディス・コミックの教師像に、その読者は憧れていることになる。

したがって、レディス・コミックに現れたこうした教師像は、読者の中心である現代の若年主婦層の教師像を端的に示していると考えられる。高学歴女性が急激に増加したことにより、20代、30代の女性で教員免許状を取得している者も数多くなっている。そうした若年主婦層にとっては、すでに教師という職業は権威を持った厳しい職業ではなく、もっとも身近な専門職なのであろう。レディス・コミックに、こうした教師像が繰り返し現れるのは、そうした女性たちが共通して持っている教師像が反映されているからに他ならない。

3 恋愛対象としての教師

(1) 恋愛の三類型

少女マンガに描かれるもう一つの「憧れ」は教師との恋愛である。この恋愛対象としての教師を描いたマンガ(以下、恋愛教師マンガと略記する)は、職業教師マンガとは異なり、1960年代から現在まで一貫して描かれ続けている。

主人公同士が、互いに惹かれあいながらも、数々の障害により容易には結ばれないという恋愛教師マンガの基本的なストーリーは、他の一般的な恋愛マンガにも同様に見られるものである。したがって、恋愛教師マンガは、たんに一般的な恋愛マンガの状況が教師と生徒という関係に置き換えられただけなのかもしれない。しかし、そこで語られるのは、教師と生徒という関係だからこそ生じる恋愛の成立し難さであり、その点で他の一般的な恋愛マンガとは大きく異なっている。

恋愛教師マンガに見られるこうした教師と生徒の関係を形成する難しさは、「恋愛」という特殊な状況のみに見られるものではない。むしろ、一般的な教師と生徒の関係を形成する困難さが「恋愛」という状況にデフォルメされていると考えるべきであろう。つまり、恋愛教師マンガの中で示される恋愛関係が成立する際の障害は、一般的な教師と生徒の関係を形成する際にも現れる障害が強調されている。したがって、恋愛教師マンガを分析することで、一般的な教師と生徒の関係が、読者層である生徒にどのようにイメージされているのかを明らかにすることができる。

ここで、恋愛教師マンガの内容を検討する前に、そのタイプを三つに分類しておこう。第一にあげられるのが生徒から教師へ、つまり生徒が教師に憧れるものである。このタイプの作品としては、古くは本村三四子(1969)『奥様は18歳』から、柴田あや子(1976)『はだしの青春』、塩森恵子(1979)『希林館通り』、くらもちふさこ(1989)『海の手辺』、上田美和(1992)『Oh!my ダーリン』、いくえみ綾(1993)『I LOVE HER』、そして河原和音(1997)『先生!』など多数あげられる。このタイプは、恋愛教師マンガの典型であり、作品数がかつても多くなっている。また、ここにあげた他にも、夥しい数の短編がある。先に指摘したように、これらは一般的な恋愛マンガの延長として捉えられるが、恋愛相手が教師であるがゆえに起こる恋愛の成立と維持の難しさが描かれている。

第二のタイプは、教師から生徒へ、つまり教師が生徒に憧れるものである。このタイプは非常に少なく、いわゆる正統派の少女漫画では前章でも紹介した聖千秋『君は僕の太陽だ』のみであった。しかし、このマンガでは、主人公が生徒と恋愛関係になるのは教師になる以前という設定により、教師から生徒へ

の求愛という行為が回避されている。また、桑田乃梨子の連作『青春は薔薇色だ』『人生は薔薇色だ』では、はっきりと教師側からの求愛行動がとられるが、主人公の女教師は制服マニアという変わった性格の持ち主という設定になっている。他にも、女教師が生徒を誘惑する高口里純『少年濡れやすく恋なりがたし』など読者の年齢が高い雑誌にはこのタイプのマンガが掲載されているが、いずれも主人公の教師は異常な性格という設定になっている。

このタイプのマンガが少ない理由については、後の分析で明らかにしたい。

第三のタイプは、教師間、または教師と他の職業の者の恋愛を描いたものである。これは、前章で分析を行った1970年代までの少女マンガ、および1990年代のレディス・コミックなどに掲載されている。先に分析を行ったため、以下ではこのタイプは除外することにした。

以下の分析では、これら三つのタイプのうち、もっとも多く現れる第一のタイプ、つまり、生徒が教師に憧れるマンガを中心に分析を行う。

(2) 物語の構成

「生徒から教師へ」というタイプの恋愛教師マンガは、ほとんどのものが同一の明確なストーリー・パターンによって構成されていた。そのパターンとは次のような4段階を経てストーリーが展開されることである。

1) 教師への憧れ

まず、教師に憧れる生徒が存在する。ただし、生徒が教師に憧れる理由は曖昧であり一定していない。

2) 教師の曖昧な態度による不安

次に、教師の気持ちを把握できないという生徒側の心理的葛藤が描かれる。例えば、他の生徒や教師が主人公のライバルとして存在し、そうしたライバル達にもやさしく接する教師の態度に、主人公である生徒の気持ちは激しく動揺する。

3) 恋愛の成立

2)と前後して、教師と生徒の恋愛が成立する。多くの場合、他の教師や生徒には関係を隠しながらストーリーが展開する。

4) ハッピーエンド

生徒の卒業などによって二人が結ばれ、周囲からも祝福されることで結末が迎えられる。

このようなストーリー展開のうち、重要な点は次の二点であろう。第一点は、「1) 教師への憧れ」で、憧れの対象となる教師に共通の属性が見られないことである。登場する教師は、他の女生徒からも人気がある優れた容姿を持つ

場合もあれば、目立たず注目されない教師である場合もある。また、生徒が教師に憧れる明確な理由もとくに述べられないのが普通である。もし、理由があったとしても、その教師の「やさしさ」や「ひたむきさ」など抽象的である場合が多い。つまり、恋愛教師マンガでは、憧れの対象となるべき理想の教師像が提示されていないことになる。

第二点は、「2) 教師の曖昧な態度による不安」の重要性である。上の2)と3)はこの順序になるとは限らない。「3) 恋愛の成立」の後にも、ライバルの出現などによって両者の関係が不安定となり、「2) 教師の曖昧な態度による不安」が再現される。つまり、物語が結末を迎えるまで、「2) 教師の曖昧な態度による不安」は何度も繰り返されるのである。

ここで、柴田あや子(1976)『はだしの青春』とくらもちふさこ(1989)『海在天辺』について、ストーリー展開を例示しておこう。

『はだしの青春』

- 1) 主人公泉沢鈴子は、新任教師南条恭助に心をひかれるようになる。そのきっかけは雨に濡れながら墓の前で泣いていた南条を見かけたことであったが、好きになった理由が明確に示されないまま、鈴子は南条に恋心を告白する。
- 2) 鈴子に思いを寄せる男性、南条に言い寄る女性があらわれ、鈴子の心は揺れる。
- 3) 鈴子が南条の日記を読むと、そこには鈴子への愛がつづられていた。それをきっかけに南条と鈴子は愛を誓い合う。その後、鈴子がガンに冒されていることがわかる。そのことを隠した南条のとる行動は愛を失なったように見えるため、鈴子の心を悩ませてしまう - 2)の再現。
- 4) 鈴子がガンで死ぬ間際に帰ってきた南条と、再び愛を確認しあう。

『海在天辺』

- 1) 主人公シーナは毎朝同じ電車で通う河野先生のことがかしだいに好きになる。好きになった理由については、まったく触れられていない。
- 2) 河野はシーナに思わせぶりの言動をとるが、他の女教師たちとの関係が噂になるなど、シーナは河野の気持ちが変わらずに悩む。また、シーナに好意を寄せる男子生徒も現れる。
- 3) シーナと河野は職員室でキスをする。しかし、その後も河野の態度がはっきりとせず、両者の関係は曖昧なままである - 2)の再現。
- 4) 河野から指輪をもらうことで、二人の関係が確実なものとなる。

このように1970年代と1980年代終わりの恋愛教師マンガで、ストーリー展開に大きな違いは見られない。主人公が教師に憧れる理由は明示されず、「2) 教師の曖昧な態度による不安」は何度も反復される。もちろん、登場人物の性格設定や表現技法は大きく異なっているが、1996年に連載が開始された河原

和音『先生!』でも同じストーリー展開が踏襲されている。それでは、こうしたストーリー展開は、何を意味しているのだろうか。次節では、これらの段階の中で、もっとも長く、そしてさまざまなエピソードが織り込まれる「2) 教師の曖昧な態度による不安」について検討を行おう。

(3) 教師 - 生徒関係成立の難しさ

恋愛教師マンガという物語の中心とも言える「教師の曖昧な態度による不安」という生徒の状態に、日常的な教師と生徒の関係が恋愛関係へとデフォルメされ、現実の教師と生徒の関係を成立させる難しさが明確に表現されていると考えられる。それでは、教師と生徒が関係を深める難しさは、どのような点に現れているのだろうか。以下では、もっとも多く現れる二点について検討しよう。

第一点は、教室内における教師の立場である。恋愛教師マンガでは「いつも私のことを見ていてほしい」という生徒の気持ちと、一人の生徒のみに関心を向けていられない教師の立場とが繰り返し主張される。たとえば、次のように生徒は教師に対する不満を述べる。

なんとなく / 朝 いつも一緒に通えて
もしかして 自分は / 特別かもって気してたけど
そーだよな / 先生ってみんなに平等だし
ちょうど / 空とか海とか / 太陽とか月とか
ひとつしかないものであって
誰のものでもないし / 誰のものでもあるし
だから / あたしだけの先生には / なって欲しくない
(くらもち 1989 1巻 59頁)⁽⁶⁾

私は同じだ / たくさんいるうちのひとりだ
(中略)
私みたいな子は / いっぱいいるのかな
ムリなのかな / 特別になりたいなんて
(河原 1997 1巻 131-132頁)

このように、教師を慕う生徒は、他の生徒にも平等に対応する教師の態度に満足できない。そして、自分が「特別」になることができない状況に強い不満

⁽⁶⁾引用中の「/」は改行を示す。以下の引用でも同様に改行を表記した。

を抱く。このことは、現実の生徒も、教師との距離を縮めようとする際に同様の不満を持っていることを示している。

現実の教師は、たんに倫理的な問題を超えて、個別の生徒と良好な生徒関係を結ぶことは非常に困難である。教師が担任する生徒は40人前後であり、その他の教科を担当する生徒なども加えると教師が接する生徒は百人を大きく超える。教師がこのような多数の生徒と個別に良好な関係を保ち続けるのは不可能であり、担任しているクラスの生徒でさえ、その期待に常に応えられるとは限らない。また、教師の仕事は生徒との関係を築くことだけではなく、進路指導、生活指導、教材研究など教え切れない。その一方で、生徒たちは教師に「いつも私のことを見ていてほしい」と望んでいる。教師の現状を考えれば、現実の教師が、生徒が求めるような個別の親密な関係を築くのは事実上不可能である。このような現実の教師の状況が、恋愛教師マンガで教師が生徒に対してとる対応に反映されていると考えられる。

教師と生徒が関係を深める難しさの第二点は、恋愛教師マンガの中の教師と生徒の関係が一方向のみにしか開かれていないということである。つまり、生徒が教師との良好な関係を深めようとすることは許されるが、その逆に教師が生徒との関係を深めることは許されない。生徒から教師への思いは、第一点で示したように一般的であり、強い関係が求められる場合もある。しかし、教師が生徒との関係を積極的に求めるというエピソードはほとんど見られず、もしあったとしても、生徒はそのことに強く反発してしまう。たとえば、『希林館通り』の主人公花梨は、ある教師に憧れ、結ばれることを望んでいた。しかし、その教師にプロポーズされた後、彼女は泣きながら次のような反応をする。

ちがう！ちがうわ！こんなはずじゃない
結婚なんて / 結婚なんて / やだ
そんなのやだ～っ / やだあ～っ
(塩森 1979 1巻 157-158頁)

このようにして主人公は教師からのプロポーズを拒絶するとともに、激しい心理的ショックを受けてしまう。つまり、教師が生徒に近づくことは、生徒にとって許されないことであり、そういったことが生じた場合は、激しい抵抗を示す。それが物語世界であってさえ、上の主人公花梨は、プロポーズされた教師を受け入れるために、非常に長い時間と数多くのエピソードを必要としているのである。

現実の生徒にとっての学校世界は、自分たち生徒と教師という二つの異なる社会集団によって構成されている。つまり、教師は異なる文化、価値観を持つ

た「大人」であり、生徒たちによって構成される社会集団の外部に存在している。したがって、生徒たちの教師への憧れは、一種の異世界に対する憧れに似たものとなる。生徒たちは無責任に教師の世界を美化し、比較的容易に外部の存在である教師に好意を持つことができる。しかし、それが逆方向に向かうことは許されない。教師が生徒に近づくことは、生徒集団への外部からの侵入に他ならない。そのため、生徒たちは教師に近づく一方で、近づく教師を激しく拒むことになる。こうした生徒たちの精神世界が恋愛教師マンガの教師と生徒の関係に反映されているのだろう。

また、先の分類で、教師が生徒に憧れるというタイプが非常に少なく、しかもそこで描かれた教師の性格が異常であった理由はここにある。現実の生徒にとって、教師との関係は生徒からの一方向のみにすぎない。そのため、生徒が教師に近づく物語は憧れの物語として積極的に受容できるが、教師が生徒に近づく物語はまったく受け入れられない。教師が生徒に近づく物語を成立させるには、教師の属性を大きく変化させる必要がある。その結果として、教師が生徒に憧れる物語では、教師の性格が異常にならざるを得なかったのである。

4 考察

以上、少女マンガに現れた教師像について分析を行ってきた。ここで、これまでの結果をまとめておきたい。

- 1) 少女マンガ誌に現れた職業教師マンガには、少女たちの将来の希望が反映されており、そこに描かれた理想の教師になりたいという願望が表現されていた。そうしたマンガは1980年代には消え去り、1990年代に入ってレディス・コミックで再登場する。しかし、レディス・コミックに描かれた教師像は、安楽で恋愛の機会が多いという表面的なものであった。
- 2) 恋愛教師マンガは、生徒が教師に憧れるという同じストーリー展開の物語が一貫して発表されている。そこに現れる教師には共通の特徴がみられないことから、憧れの対象となるべき理想の教師像が提示されていないことを指摘した。また、そのストーリー中の「教師の曖昧な態度による不安」という段階に注目し、生徒は教師に「いつも私のことを見てほしい」と願っているが、教師がその願いに応えることは困難であることと、教師と生徒の関係は生徒から教師への一方向であり、その逆は生徒からの激しい抵抗にあうことが明らかにされた。

これらの結果をもとに次の三点において考察しておこう。第一点は、恋愛教師マンガで主人公が憧れる教師には、共通の特徴がみられなかったことであ

る。主人公にとって重要なのは、どのような人物に恋心を抱くかということではなく、教師との関係を深めることだけである。つまり、恋愛教師マンガには、確固とした理想の教師像が存在せず、教師と生徒の理想の関係のみが表現されている。

先に紹介したように、少年マンガの変遷では、1980年代以降は不良教師が主人公となっていることが指摘されている(山田 1999 34-36 頁)。このことから、学校の日常性を破壊する不良教師が、男子生徒にとっての理想であったと考えることができよう。しかし、恋愛教師マンガで恋愛によって破壊されるのは、学校という公的な空間ではなく主人公の内的世界の日常性である。つまり、そこでは平凡な学校生活を送る生徒が教師との恋愛によって内面を揺り動かされ、精神的な変化を得ることが望まれている。

このことを現実の教師と生徒の関係に当てはめてみよう。恋愛教師マンガ読者が望んでいるのは内面への影響力であり、それを与えてくれる存在として教師がいる。そうした影響力を持っていれば、教師の性格や属性はあまり重要とならない。つまり、現実の女子生徒は、理想の教師像ではなく、個々人の内面にまで踏み込んだ密接な教師と生徒の関係を期待しているのである。

しかし、生徒が望む教師との関係は、本分析で明らかにしたように生徒から教師への一方向にすぎない。第二点として、この教師と生徒のアンバランスな関係について考察しておこう。少年マンガの分析では、生徒は教師を拒絶しながらも救いを求めるといふ、生徒の二律背反的な願いがマンガに反映されていることが指摘されている(山田 1999 36-37 頁)。これは、本稿で明らかにした恋愛教師マンガでの教師と生徒の关系到類似している。したがって、教師と生徒の关系到における一方向性は、女子生徒に限らず、生徒一般に共通する特性であると考えられる。

重要なのは、こうした教師と生徒の关系到が、少年マンガ、少女マンガのいずれにおいても、少なくとも1970年代以後大きく変化していないことである。つまり、生徒の側から見た教師と生徒の关系到は、管理主義教育の時代も、現在も同じものにすぎない。最近の学校改革などは生徒の要望を大きく取り入れたものになっている。このこと自体は評価できるが、両者の关系到の改善は、たんに教師の側からだけ行うことは出来ない。双方が共に歩みよる必要がある。今後、このような視点のもとに、現実の教師と生徒の关系到を分析すれば、新たな学校改革の指針が見いだせるかもしれない。

第三点は、レディス・コミックに現れた教師像である。すでに、レディス・コミックの表面的な教師像は、現在の若年主婦層の教師像を反映したものであることを指摘した。このことは、たんにマンガの中だけでなく、現実の教師と親との关系到も、親のこうした教師像によって形成されている可能性を示し

ている。

レディス・コミック読者は、現実の教師がどのように働いているのかを知らず、レディス・コミックに現れたような表面的な教師像を現実の教師にあてはめてしまう可能性がある。その結果として、教師が親からの信頼を得にくいなどの両者のギャップが生み出されたとも考えられる。今後、教師と親、あるいは地域との連携を深めるためには、こうした教師像のズレが存在していることを考慮し、それを修正することも必要であろう。

引用文献

- 馬居政幸 (1993) 『なぜ子どもは少年ジャンプが好きなのか』 明治図書。
エスカルピ, R., 大塚幸男訳 (1959) 『文学の社会学』 白水社。
衿野未矢 (1993) 『レディス・コミックの女性学』 廣済堂出版。
蕪木和夫 (1991) 『マンガ界のウラの裏がわかる本』 ぴいぷる社。
山田浩之 (1999) 「マンガの『熱血教師』はどこに消えたか」『論座』 1999年6月号、朝日新聞社。
吉弘幸介 (1993) 『マンガの現代史』 丸善。
『別冊太陽 子どもの昭和史 少女マンガの世界 昭和38年～64年』 (1991) 平凡社。
『別冊宝島 日本一のマンガを探せ!』 (1997) 宝島社。
『別冊宝島 70年代マンガ大百科』 (1996) 宝島社。

分析対象とした少女マンガの一覧

マンガ作家名の五十音順に記した。出版年は単行本第一巻のものを記し、初出単行本の出版年が不明であるものは連載開始年と掲載雑誌名を示した。

- 乾東里子原作、青池保子絵 (1972) 「出席をとりまあす」『週刊少女コミック』、小学館。
有吉京子 (1973) 『センセーに敬礼!』 (全2巻)、集英社。
いくえみ綾 (1993) 『I LOVE HER』 (全5巻)、集英社。
井沢陽子 (1998) 『ウェディング・キッス』 (全1巻)、講談社。
石井まゆみ (1991) 『先生は良いコ』 (全1巻)、講談社。
いでまゆみ (1994) 『オモテに出る』 (全3巻)、角川書店。
上田美和 (1992) 『Oh!my ダーリン』 (全8巻)、講談社。
金子節子 (1979) 『オッス! Gパン先生』 (全2巻)、集英社。

河原和音(1997)『先生!』(既刊9巻)、集英社。
樹原ちさと(1982)『ムーちゃん先生!!』(全1巻)、集英社
くらもちふさこ(1989)『海の天辺』(全4巻)、集英社。
桑田乃梨子(1988)『青春は薔薇色だ』(全1巻)、白泉社。
桑田乃梨子(1990)『人生は薔薇色だ』(全1巻)、白泉社。
斉藤倫(1990)『タマネギなんかこわくない!』(全3巻)、集英社。
酒井美羽(1996)『涙の果実』(全1巻)、角川書店。
酒井美羽(1997)『教師にやらせな!』(全1巻)、角川書店。
佐藤真樹(1994)『ウエディング・ウエディング』(全1巻)、集英社。
里中満智子(1971)『花よめ先生』『少女フレンド』、講談社。
塩森恵子(1979)『希林館通り』(全8巻)、集英社。
柴田あや子(1976)『はだしの青春』(全4巻)、集英社。
鈴木由美子(1986)『チョコ22歳 学問ノムスメ』(全1巻)、講談社。
高口里純(1992)『少年濡れやすく恋なりがたし』(全7巻)、角川書店。
灘しげみ(1979)『出席をとります』(全3巻)、ひばり書房。
西谷祥子(1973)『不良先生』(全2巻)、集英社。
聖千秋(1991)『君は僕の太陽だ』(全4巻)、集英社。
ひたか良(1980)『ザ・先生シオン!』(全2巻)、集英社。
真柴ひろみ(1987)『ひとみいっぱいなのみだ』(全3巻)、講談社。
松苗あけみ(1983)『純情クレイジーフルーツ』(全2巻)、集英社。
松苗あけみ(1985)『純情クレイジーフルーツ続編』(全9巻)、集英社。
美村あきの(1993)『高校教師・野原夢子の恋』(全2巻)、講談社。
本村三四子(1969)『おくさまは18歳』(全4巻)、集英社。
もりたじゅん(1970)『キャー!先生』『りぼん』、集英社。
夢路行(1995)『鈴が鳴る 教室の四季シリーズ』(全1巻)、集英社。
吉原由起(1996)『はあはあ』(全3巻)、小学館。